3 運転中止に拒否的である場合や、突然の運転中止によって、患者さんの意欲低下の恐れが強い場合は、まず、家族が同乗し、定期的に運転行動を観察するようにしましょう。また、安全に運転していると思われる場合にも、定期的な観察をして、チェックすることが大切です。

☑ 運転チェック

認知症が原因で、失敗することの多い運転行動について、観察しましょう。
以下の6項目について、特に注意して観察するようにしてください。そして、こうした運転がみられた日付をメモしておきましょう。その時の患者さんの様子などもメモしておくと、後で、主治医や警察署・免許センターに相談するときに役立ちます。

運転チェック	日付	日付	日付	気づいたこと
1. センターラインを越える				
2. 路側帯に乗り上げる				
3. 車庫入れ(指定枠内への駐車)に失敗する				
4. ふだん通らない道に出ると、急に迷ってしまう				
5. ふだん通らない道に出ると、パニック状態になる				
6. 車間距離が短くなる				

(熊本大学医学部　池田学教授　作成)

上の6項目の運転状況は、年をとっただけで増えてくる失敗というわけではなく、認知症という病気のためにさらに起こりやすくなる失敗です。1つでも繰り返して起こすようなときは、交通事故を起こす確率が高く、危険であることを示すサインです。患者さんも理解した上で運転を中止できるように、粘り強く説得しましょう。

平成19-21年度厚生労働科学研究費補助金(認知症対策総合研究事業)「認知症高齢者の自動車運転に対する社会支援のあり方に関する検討」
(H19-認知症-一般-025)研究班(研究代表者　荒井由美子)

4 相談窓口～運転中止がうまくいかないとき～

家族の話し合いでは解決できない問題があるとき、あるいは、どうしても患者さんが運転中止を拒否し、うまくいかない場合には、専門の機関に相談しましょう。事前に、電話などで担当者に事情を説明しておくことも有効です。

警察署、免許センター

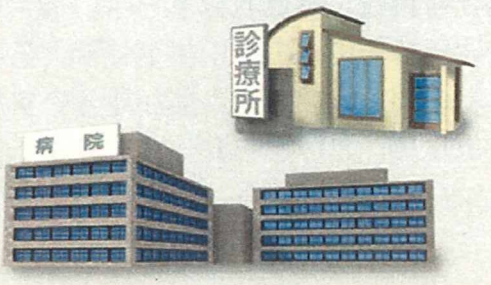
- **運転技能や運転免許についてなど、運転にかかわる全般的なこと**

運転適性相談窓口があります（認知症やその他の病気のために運転に不安がある場合などに、免許の更新について相談できます）。

病　院、診療所、認知症疾患医療センター

- **認知症のこと**
- **患者さんへの接し方**

患者さんが運転しており、不安な場合には、主治医にも相談してみましょう。



市区町村の役場
高齢者福祉・介護関係の窓口

- **移動・外出支援サービスのこと**
- **介護保険サービスのこと**
- **高齢者福祉サービスのこと**

その他、社会福祉協議会やシルバー人材センター、NPO法人（特定非営利活動法人）などで、移動・外出支援サービスを提供している場合もありますので、調べてみましょう。

ワンポイントアドバイス

■公共交通機関の乏しい地域にお住まいの場合

ご家族が同居している場合には、週末の買い物などに一緒に出かける工夫をしてください。高齢者の一人暮らしや高齢者のみの世帯では、地域の隣人や友人に、移動の援助を依頼しておくとよいでしょう。

あるいは、食材や生活用品の宅配サービスを実施している業者がありますので、利用を検討してみてはいかがでしょうか。また、お住まいの地域に、移動支援サービスや、買い物等の外出を支援するサービスがあるかもしれません。一度、市区町村の役場窓口に尋ねてみてください。

■経済的な理由により運転中止が困難な場合

経済的な理由（たとえば、仕事を辞めることで収入が一切なくなる）により、どうしても運転を継続しなければならない場合には、できるだけ初期の段階で、患者さんが自動車を運転する必要のない生活に変えるなどの対応が必要です。そのためには、家族や知人などの周りの協力や支援が重要ですが、家族などの頼れる人がいない場合もあるかもしれません。おひとりだけで悩まず、お住まいの市区町村役場やお近くの地域包括支援センター、あるいは、地域の「認知症高齢者や家族を支える会」に相談するようにしてください。

■「鍵隠し」「車隠し」は最後の手段

運転を中止させるために、鍵や車を隠すことは、ご本人の興奮や被害妄想を悪化させ、逆効果になることがあります。認知症であっても、早期の段階で、ご本人と話し合い、きちんとした説明や納得を得られるような工夫が必要です。自動車の処分は、最後の手段と考えましょう。

■飲酒について

運転中止後に飲酒量が増えたり、過食行動や外出の欲求が増えたりする場合があります。その場合は、デイサービス・デイケアの利用やご家族がドライブに付き合う、趣味活動を取り入れるなどの行動に置き換えていく対応も効果的です。

■（自動車の代わりとしての）「電動車いす」や「自転車」の利用について

電動車いすや自転車を、自動車の代わりとしてはどうか、とお考えになることもあるでしょう。しかし、認知症のように、認知機能が低下したり身体機能が低下したりする病気の場合、電動車いすや自転車の運転にも支障が生じるため、交通事故に遭う危険性が高くなり、お勧めできません。なるべく、公共交通機関や地域の移送サービス等、ご本人が運転操作をしない状況で、移動・外出を支援するようにしましょう。

平成19-21年度厚生労働科学研究費補助金（認知症対策総合研究事業）「認知症高齢者の自動車運転に対する社会支援のあり方に関する検討」
（H19-認知症-一般-025）研究班（研究代表者　荒井由美子）

運転中止に納得した患者さんが、忘れてしまうことを防ぐために

患者さんは、運転を中止したことを忘れてしまい、また運転しようとしてしまうかもしれません。そのようなときには、主治医に次のような文書を作成してもらうことも有効です。

○○○○さん

あなたは、もの忘れが始まっていて、安全に運転することが難しくなってきています。このような場合、運転を続けることは危険であると、法律にも定められています。運転を中止するよう準備をしましょう。

○△病院　医師　□□□□

ご自宅の目に付くところに貼って、患者さんが運転しようとしたら、こちらを見て頂き、「主治医の先生にこう言われて、運転を中止すると約束したでしょう。」と説明してください。

患者さんが、長年続けていた運転を中止したことは大きな決断であり、また中止を続けていることも、ご本人にとって我慢の連続であることでしょう。ご家族は、ぜひ、患者さんの努力と判断に対して、言葉をかけ労(ねぎら)ってください。ご家族からの温かい言葉がけは、患者さんの気持ちを穏やかにし、自信にもつながります。

フローチャート 認知症高齢者の自動車運転への対応、考え方

●自動車を運転している方が認知症かもしれない、という心配が出てきたときに、参照してください。

正確な診断 ▶ まずは医療機関を受診し、正確な診断を受けましょう。

↓

病気の理解 ▶ さまざまな認知症があります。主治医から症状や運転への影響について、よく説明を聞きましょう。

↓

家族での話し合い ▶ 早い段階で、「運転の継続が難しくなること」について、患者さんと話し合いましょう。

↓

運転の継続を希望している場合

運転チェック ▶ ●家族が同乗し、危険な運転行動がないかどうかを定期的に確認しましょう。

家族での話し合い ▶ ●危険な運転行動が確認された際には、ご本人を含め、できるだけ話し合いの機会をもちましょう。

↓

運転チェックで頻発する項目が見られるようになったら

家族での話し合い ▶ ●患者さんとご家族で、運転の中止について話し合いましょう。

専門機関への相談 ▶ ●早めに、主治医、警察署・免許センターへ相談するとよいでしょう。

→

運転を中止した場合

●中止の継続を支援しましょう。

●移動・外出を支援しましょう。

◀ **移動・外出支援**

平成19-21年度厚生労働科学研究費補助金（認知症対策総合研究事業）「認知症高齢者の自動車運転に対する社会支援のあり方に関する検討」（H19-認知症・一般-025）研究班（研究代表者　荒井由美子）

memo

Copyright© 平成19-21年度厚生労働科学研究費補助金（認知症対策総合研究事業）「認知症高齢者の自動車運転に対する社会支援のあり方に関する検討」（H19-認知症-一般-025）研究班（研究代表者　荒井由美子）2010 All rights reserved.

増える認知症ドライバー

免許返納に抵抗感

中央線を越えても自覚がない。事故を起こしたことを忘れていた―。認知症ドライバーの特徴だ。記憶力や判断力が低下し、思わぬ事故につながりかねず、運転をやめてほしいと願う家族は多い。本人とどう向き合えば良いのだろう。

「夫は認知症なのに…」。坂本一美さん（仮名）が手にするのは、更新された夫の運転免許証

警察庁は2005年時点で、運転免許を持っている認知症の高齢者数を30万人と推定した。国士舘大の所正文教授（交通心理学）は、免許保有率の高い団塊世代が高齢になり、さらに増えている可能性があると指摘。研究の蓄積も乏しく「どういう症状が運転行動にどう結びつくのか、そのためにどういう検査を開発すべきか、まだ分からないことは多い」と話す。

昨年6月から運転免許を更新する際、75歳以上の高齢ドライバーに認知機能検査が義務付けられたが、正確な判断は難しいといわれる。日本交通心理学会の運営委員を務める石川浮也・中央自動車学校（盛岡市）社長は「疑わしい場合は、年齢に関係なく認知機能検査を受けさせるべきだ」と語る。

「認知症の人と家族の会」神奈川県支部は昨年9月、会員を対象にアンケートを実施した。世話人田村加代子さんは「何十年も無事故で運転に自信を持っている人が多く、免許の返納には抵抗があるようだ」と分析。「高齢者にとって運転することは自立の象徴。簡単に返納させるのではなく、精神的フォローや代替手段が必要だ」と話す。

生きがい見つけて

精神的フォロー必要

坂本一美さん(74)＝仮名＝は1年半前、夫(75)の退職後に移り住んだ山梨県から神奈川県に戻ってきた。車好きの夫がアルツハイマー型認知症と診断されたからだ。山小屋暮らしに必要だった車は、本人の知らない間に売却。しかし夫は昨年5月、免許を更新する際に70歳以上の人に求められる高齢者講習をクリアしてしまった。一美さんは「教習所に『不合格』と言ってもらいたかった」と後悔する。

岩手県の佐藤隆さん(54)＝同＝は、脳血管性認知症になった父(88)を、免許の更新を見送るよう説得した。父は坂道でサイドブレーキをかけずに駐車し自分の車にひかれるなどの事故を起こすようになっていて「他人を巻き込まない方がいい」との家族の忠告を渋々受け入れた。隆さんは「身近な家族の話は聞かないことが多い。第三者に言われた方が効果があるかも」と話す。

国立長寿医療センター長寿政策・在宅医療研究部の荒井由美子部長らの厚生労働科学研究班は、認知症の基礎知識や事例に基づいた対処法、運転行動のチェック項目などをまとめた、家族のための支援マニュアルを同部のホームページ上で公開、全国の自治体にも配布する。

荒井部長は「運転する意味や目的を考え、運転以外の生きがいや移動の手段を見つけることが大切だ」と話している。

認知症ドライバーに多くみられる特徴

- どこへ行こうとしているのかが分からない
- 事故を起こしたことを忘れる
- センターラインを越えて蛇行運転する
- 交通標識や信号などの交通規則を守る気がなくなる
- 一定の車間距離をとる気がなくなる
- 車庫入れができない
- 逆走する

（出典：国士舘大の所正文教授「高齢ドライバー激増時代」など）

媒体名：京都新聞　　掲載日：2010/2/7

認知症ドライバー

判断力や行動 チェックを

中央線を越えても自覚がない。事故を起こしたことを忘れていた―。認知症ドライバーの特徴だ。記憶力や判断力が低下し、思わぬ事故につながりかねず、運転をやめてほしいと願う家族は多い。本人とどう向き合えば良いのだろう。

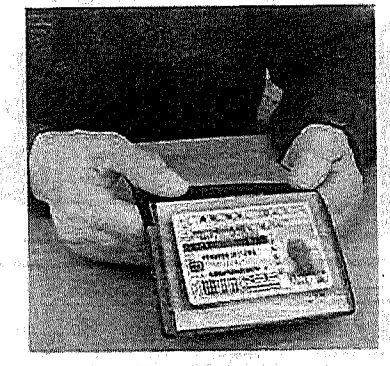
認知症ドライバーに多くみられる特徴

- どこへ行こうとしているのかが分からない
- 事故を起こしたことを忘れる
- センターラインを越えて蛇行運転する
- 交通標識や信号などの交通規則を守る気がなくなる
- 一定の車間距離をとる気がなくなる
- 車庫入れができない
- 逆走する

（出典：国士舘大の所正文教授「高齢ドライバー・激増時代」など）

高齢者は免許返納に抵抗感

運転の意味 家族で考えて



「夫は認知症なのに…」。坂本一美さん（仮名）が手にするのは、更新された夫の運転免許証

警察庁は2005年時点で、運転免許を持っている認知症の高齢者数を30万人と推定した。国士舘大の所正文教授（交通心理学）＝写真＝は、免許保有率の高い団塊世代が高齢になり、さらに増えている可能性があると指摘。研究の蓄積もない。

「どういう症状が運転行動にどう結びつくのか、そのためにどういう検査を開発すべきか、まだ分からないことは多い」と話す。

昨年6月から運転免許を更新する際、75歳以上の高齢ドライバーに認知機能検査が義務付けられたが、正確な判断は難しいといわれる。日本交通心理学会の運営委員を務める石川淳也・中央自動車学校（盛岡市）社長は「疑わしい場合は、年齢に関係なく認知機能検査を受けさせるべきだ」と語る。

「認知症の人と家族の会」神奈川県支部は昨年9月、会員を対象にアンケートを実施した。世話人田村加代子さんは「何十年も無事故で運転に自信を持っている人が多く、免許の返納には抵抗があるようだ」と分析。

「高齢者にとって運転することは自立の象徴。簡単に返納させるのではなく、精神的フォローや代替手段が必要だ」と話す。

◎◎◎

坂本一美さん（74）＝仮名＝は1年半前、夫（75）の退職後に移り住んだ山梨県から神奈川県に戻ってきた。車好きの夫がアルツハイマー型認知症と診断されたからだ。山小屋暮らしに必要だった車は、本人の知らない間に売却。しかし夫は昨年5月、免許を更新する際に70歳以上の人に求められる高齢者講習をクリアしてしまった。「美さんは「教習所に『不合格』と言ってもらいたかった」と後悔する。

岩手県の佐藤隆さん（54）＝同＝は、脳血管性認知症になった父（88）を、免許の更新を見送るよう説得した。父は坂道でサイドブレーキをかけずに駐車し自分の車にひかれるなどの事故を起こすようになっていて「他人を巻き込まない方がいい」との家族の忠告を渋々受け入れた。隆さんは「身近な家族の話は聞かないことが多い。第三者に言われた方が効果があるかも」と話す。

◎◎◎

国立長寿医療センター長寿政策・在宅医療研究部の荒井由美子部長らの厚生労働科学研究班は、認知症の基礎知識や事例に基づいた対処法、運転行動のチェック項目などをまとめた、家族のための支援マニュアルを同部のホームページ上で公開、全国の自治体にも配布する。

荒井部長は「運転する意味や目的を考え、運転以外の生きがいや移動の手段を見つけることが大切だ」と話している。

「認知症高齢運転者」の介護者支援マニュアル

国立長寿医療センター

国立長寿医療センターは、「認知症高齢者の自動車運転を考える家族介護者のための支援マニュアル」を、8日からインターネットで無料ダウンロード配布する。高齢運転者が認知症になった場合、どこに相談したらいいか分からないと悩む家族介護者も多いのが現状。同マニュアルでは、認知症に起因する運転時のリスクや運転継続が望ましくなくなった場合の対応など、これまでの研究で得た成果を具体例を交えて紹介している。

支援マニュアルは、同センター長寿政策・在宅医療研究部ホームページ(http://www.nils.go.jp/department/dgp/index-dgp-j.htm)でダウンロードできる。

認知症ドライバー

免許返納に抵抗感

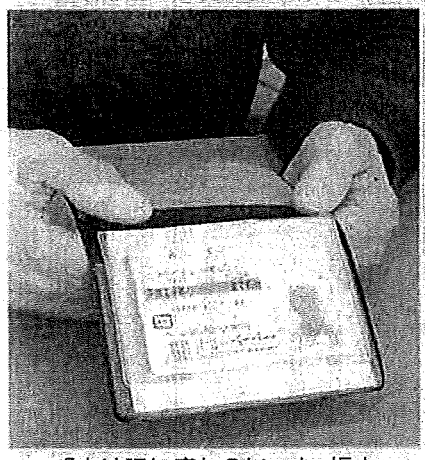
精神的フォローが必要

中央線を越えても自覚がない。事故を起こしたことを忘れていた―。認知症ドライバーの特徴だ。記憶力や判断力が低下し、思わぬ事故につながりかねず、運転をやめてほしいと願う家族は多い。本人とどう向き合えば良いのだろう。

警察庁は2005年時点で、運転免許を持っている認知症の高齢者数を30万人と推定した。国士舘大の所正文教授（交通心理学）は、免許保有率の高い団塊世代が高齢になり、さらに増えている可能性があると指摘。研究の蓄積もないに等しく「どういう症状が運転行動にどう結びつくのか、そのためにどういう検査を開発すべきか、まだ分からないことは多い」と話す。

昨年6月から運転免許を更新する際、75歳以上の高齢ドライバーに認知機能検査が義務付けられたが、正確な判断は難しいといわれる。日本交通心理学会の運営委員を務める石川淳也・中央自動車学校（盛岡市）社長は「疑わしい場合は、年齢に関係なく検査を受けさせるべきだ」と語る。

「認知症の人と家族の会」神奈川県支部は昨年9月、会員を対象にアンケートを実施した。世話人田村加代子さんは「何十年も無事故で運転に自信を持っている人が多く、免許の返納には抵抗があるようだ」と分析。「高齢者にとって運転することは自立の象徴。簡単に返納させるのではなく、精神的フォローや代替手段が必要だ」と話す。



「夫は認知症なのに…」。坂本一美さん（仮名）が手にするのは、更新された夫の運転免許証

坂本一美さん（74）＝仮名＝は1年半前、夫（75）の退職後に移り住んだ山梨県から神奈川県に戻ってきた。車好きの夫がアルツハイマー型認知症と診断されたからだ。山小屋暮らしに必要だった車は、本人の知らない間に売却。しかし夫は昨年5月、免許を更新する際に70歳以上の人に求められる高齢者講習をクリアしてしまった。

岩手県の佐藤隆さん（54）＝同＝は、脳血管性認知症になった父（88）を、免許の更新を見送るよう説得した。父は坂道でサイドブレーキをかけずに駐車し自分の車にひかれるなどの事故を起こすようになっていて「他人を巻き込まない方がいい」との家族の忠告を渋々受け入れた。隆さんは「身近な家族の話は聞かないことが多い。第三者に言われた方が効果があるかも」と話す。

国立長寿医療センター長寿政策・在宅医療研究部の荒井由美子部長らの厚生労働科学研究班は、認知症の基礎知識や事例に基づいた対処法、運転行動のチェック項目などをまとめた、家族のための支援マニュアルを同部のホームページ上で公開、全国の自治体にも配布する。

荒井部長は「運転する意味や目的を考え、運転以外の生きがいや移動の手段を見つけることが大切だ」と話している。

認知症ドライバーに多くみられる特徴

- どこへ行こうとしているのかが分からない
- 事故を起こしたことを忘れる
- センターラインを越えて蛇行運転する
- 交通標識や信号などの交通規則を守る気がなくなる
- 一定の車間距離をとる気がなくなる
- 車庫入れができない
- 逆走する

（出典：国士舘大の所正文教授「高齢ドライバー・激増時代」など）

運転する意味や目的考えて

認知症ドライバー

中央線を越えても自覚がない。事故を起こしたことを忘れていた―。認知症ドライバーの特徴だ。記憶力や判断力が低下し、思わぬ事故につながりかねず、運転をやめてほしいと願う家族は多い。本人とどう向き合えば良いのだろう。

警察庁は2005年時点で、運転免許を持っている認知症の高齢者数を30万人と推定した。国士舘大の所正文教授（交通心理学）は、免許保有率の高い団塊世代が高齢になり、さらに増えている可能性があると指摘。研究の蓄積も乏しく「どういう症状が運転行動にどう結びつくのか、そのためにどういう検査を開発すべきか、まだ分からないことは多い」と話す。

第三者の忠告が効果的

昨年6月から運転免許を更新する際、75歳以上の高齢ドライバーに認知機能検査が義務付けられたが、正確な判断は難しいといわれる。日本交通心理学会の運営委員を務める石川淳也・中央自動車学校（盛岡市）社長は「疑わしい場合は、年齢に関係なく認知機能検査を受けさせるべきだ」と語る。

「認知症の人と家族の会」神奈川県支部は昨年9月、会員を対象にアンケートを実施した。世話人田村加代子さんは「何十年も無事故で運転に自信を持っている人が多く、免許の返納には抵抗があるようだ」と分析。「高齢者にとって運転することは自立の象徴。簡単に返納させるのではなく、精神的フォローや代替手段が必要だ」と話す。

坂本一美さん(74)＝仮名＝は1年半前、夫(75)の退職後に移り住んだ山梨県から神奈川県に戻ってきた。車好きの夫がアルツハイマー型認知症と診断されたからだ。山小屋暮らしに必要だった車は、本人の知らない間に売却。しかし夫は昨年5月、免許を更新する際に70歳以上の人に求められる高齢者講習をクリアしてしまった。一美さんは「教習所に『不合格』と言ってもらいたかった」と後悔する。

岩手県の佐藤隆さん(54)＝同＝は、脳血管性認知症になった父(88)を、免許の更新を見送るよう説得した。父は坂道でサイドブレーキをかけずに駐車し自分の車にひかれるなどの事故を起こすようになっていて「他人を巻き込まない方がいい」との家族の忠告を渋々受け入れた。隆さんは「身近な家族の話は聞かないことが多い。第三者に言われた方が効果があるかも」と話す。

国立長寿医療センター長寿政策・在宅医療研究部の荒井由美子部長らの厚生労働科学研究班は、認知症の基礎知識や事例に基づいた対処法、運転行動のチェック項目などをまとめた、家族のための支援マニュアルを同部のホームページ上で公開、全国の自治体にも配布する。

荒井部長は「運転する意味や目的を考え、運転以外の生きがいや移動の手段を見つけることが大切だ」と話している。

認知症ドライバーに多くみられる特徴

- どこへ行こうとしているのかが分からない
- 事故を起こしたことを忘れる
- センターラインを越えて蛇行運転する
- 交通標識や信号などの交通規則を守る気がなくなる
- 一定の車間距離をとる気がなくなる
- 車庫入れができない
- 逆走する

（出典：国士舘大の所正文教授「高齢ドライバー激増時代」など）

返納に抵抗感 家族の支え大切

認知症と運転免許

代替手段見つけて

中央線を越えても自覚がない。事故を起こしたことを忘れていた―。認知症ドライバーの特徴だ。記憶力や判断力が低下し、思わぬ事故につながりかねず、運転をやめてほしいと願う家族は多い。本人とどう向き合えば良いのだろう。

警察庁は2005年時点で、運転免許を持っている認知症の高齢者数を30万人と推定した。国士舘大の所正文教授（交通心理学）は、免許保有率の高い団塊世代が高齢になり、さらに増えている可能性があると指摘。研究の蓄積も乏しく「どういう症状が運転行動にどう結びつくのか、そのためにどういう検査を開発すべきか、まだ分からないことは多い」と話す。

昨年6月から運転免許を更新する際、75歳以上の高齢ドライバーに認知機能検査が義務付けられたが、正確な判断は難しいといわれる。日本交通心理学会の運営委員を務める石川淳也・中央自動車学校（盛岡市）社長は「疑わしい場合は、年齢に関係なく認知機能検査を受けさせるべきだ」と語る。

「認知症の人と家族の会」神奈川県支部は昨年9月、会員を対象にアンケートを実施した。世話人田村加代子さんは「何十年も無事故で運転に自信を持っている人が多く、免許の返納には抵抗があるようだ」と分析。「高齢者にとって運転することは自立の象徴。簡単に返納させるのではなく、精神的フォローや代替手段が必要だ」と話す。

坂本一美さん(74)＝仮名＝は1年半前、夫(75)の退職後に移り住んだ山梨県から神奈川県に戻ってきた。車好きの夫がアルツハイマー型認知症と診断されたからだ。山小屋暮らしに必要だった車は、本人の知らない間に売却。しかし夫は昨年5月、免許を更新する際に70歳以上の人に求められる高齢者講習をクリアしてしまった。一美さんは「教習所に『不合格』と言ってもらいたかった」と後悔する。

岩手県の佐藤隆さん(54)＝同＝は、脳血管性認知症になった父(88)を、免許の更新を見送るよう説得した。父は坂道でサイドブレーキをかけずに駐車し自分の車にひかれるなどの事故を起こすようになっていて「他人を巻き込まない方がいい」との家族の忠告を渋々受け入れた。隆さんは「身近な家族の話は聞かないことが多い。第三者に言われた方が効果があるかも」と話す。

国立長寿医療センター長寿政策・在宅医療研究部の荒井由美子部長らの厚生労働科学研究班は、認知症の基礎知識や事例に基づいた対処法、運転行動のチェック項目などをまとめた、家族のための支援マニュアルを同部のホームページ上で公開、全国の自治体にも配布する。荒井部長は「運転する意味や目的を考え、運転以外の生きがいや移動の手段を見つけることが大切だ」と話している。

「夫は認知症なのに…」。坂本一美さん（仮名）が手にするのは、更新された夫の運転免許証

認知症ドライバーに多くみられる特徴

- どこへ行こうとしているのかが分からない
- 事故を起こしたことを忘れる
- センターラインを越えて蛇行運転する
- 交通標識や信号などの交通規則を守る気がなくなる
- 一定の車間距離をとる気がなくなる
- 車庫入れができない
- 逆走する

（出典：国士舘大の所正文教授「高齢ドライバー・激増時代」など）

認知症ドライバー どう対処？

運転以外の生きがいを

精神的フォローも必要

中央線を越えても自覚がない。事故を起こしたことを忘れていた―。認知症ドライバーの特徴だ。記憶力や判断力が低下し、思わぬ事故につながりかねず、運転をやめてほしいと願う家族は多い。本人とどう向き合えば良いのだろう。

警察庁は2005年時点で、運転免許を持っている認知症の高齢者数を30万人と推定した。国士舘大の所正文教授（交通心理学）は、免許保有率の高い団塊世代が高齢になり、さらに増えている可能性があると指摘。研究の蓄積も乏しく「どういう症状が運転行動にどう結びつくのか、そのためにどういう検査を開発すべきか、まだ分からないことは多い」と話す。

正確な判断難しく

昨年6月から運転免許を更新する際、75歳以上の高齢ドライバーに認知機能検査が義務付けられたが、正確な判断は難しいといわれる。

日本交通心理学会の運営委員を務める石川淳也・中央自動車学校（盛岡市）社長は「疑わしい場合は、年齢に関係なく認知機能検査を受けさせるべきだ」と語る。

「認知症の人と家族の会」神奈川県支部は昨年9月、会員を対象にアンケートを実施した。

世話人田村加代子さんは「何十年も無事故で運転に自信を持っている人が多く、免許の返納には抵抗があるようだ」と分析。「高齢者にとって運転することは自立の象徴。簡単に返納させるのではなく、精神的フォローや代替手段が必要だ」と話す。

坂本一美さん（74）＝仮名＝は1年半前、夫（75）の退職後に移り住んだ山梨県から神奈川県に戻ってきた。車好きの夫がアルツハイマー型認知症と診断されたからだ。山小屋暮らしに必要だった車は、本人の知らない間に売却。しかし夫は昨年5月、免許を更新する際に70歳以上の人に求められる高齢者講習をクリアしてしまった。一美さんは「教習所に『不合格』と言ってもらいたかった」と後悔する。

忠告を渋々受け入れ

岩手県の佐藤隆さん（54）＝同＝は、脳血管性認知症になった父（88）を、免許の更新を見送るよう説得した。父は坂道でサイドブレーキをかけずに駐車し自分の車にひかれるなどの事故を起こすようになっていて「他人を巻き込まない方がいい」との家族の忠告を渋々受け入れた。隆さんは「身近な家族の話は聞かないことが多い。第三者に言われた方が効果があるかも」と話す。

国立長寿医療研究センター長寿政策・在宅医療研究部の荒井由美子部長らの厚生労働科学研究班は、認知症の基礎知識や事例に基づいた対処法、運転行動のチェック項目などをまとめた、家族のための支援マニュアルを同部のホームページ上で公開、全国の自治体にも配布する。

荒井部長は「運転する意味や目的を考え、運転以外の生きがいや移動の手段を見つけることが大切だ」と話している。

認知症ドライバーに多くみられる特徴

- どこへ行こうとしているのかが分からない
- 事故を起こしたことを忘れる
- センターラインを越えて蛇行運転する
- 交通標識や信号などの交通規則を守る気がなくなる
- 一定の車間距離をとる気がなくなる
- 車庫入れができない
- 逆走する

（出典：国士舘大の所正文教授「高齢ドライバー・激増時代」など）

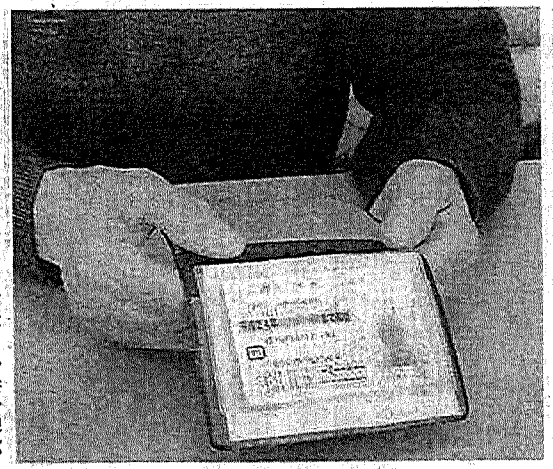
所正文
国士舘大教授

媒体名：福井新聞　　掲載日：2010/2/10

認知症と運転免許

返納に抵抗も 家族が支援を

中央線を越えても自覚がない。事故を起こしたことを忘れていた―。認知症ドライバーの特徴だ。記憶力や判断力が低下し、思わぬ事故につながりかねず、運転をやめてほしいと願う家族は多い。本人とどう向き合えば良いのだろう。



「夫は認知症なのに…」。坂本一美さん(仮名)が手にするのは、更新された夫の運転免許証

75歳以上に検査義務 ▼▼ 正確な判断は困難

警察庁は2005年時点で、運転免許を持っている認知症の高齢者数を30万人と推定した。国士舘大の所正文教授（交通心理学）は、免許保有率の高い団塊世代が高齢になり、さらに増えている可能性があると指摘。研究の蓄積も乏しく「どういう症状が運転行動にどう結びつくのか、そのためにどういう検査を開発すべきか、まだ分からないことは多い」と話す。

昨年6月から運転免許を更新する際、75歳以上の高齢ドライバーに認知機能検査が義務付けられたが、正確な判断は難しいといわれる。

「認知症の人と家族の会」神奈川県支部は昨年9月、会員を対象にアンケートを実施した。世話人田村加代子さんは「何十年も無事故で運転に自信を持っている人が多く、免許の返納には抵抗があるようだ」と分析。

「高齢者にとって運転することは自立の象徴。簡単に返納させるのではなく、精神的フォローや代替手段が必要だ」と話す。

坂本一美さん(74)＝仮名＝は1年半前、夫(75)の退職後に移り住んだ山梨県から神奈川県に戻ってきた。車好きの夫がアルツハイマー型認知症と診断されたからだ。山小屋暮らしに必要だった車は、本人の知らない間に売却。しかし夫は昨年5月、免許を更新する際に70歳以上の人に求められる高齢者講習をクリアしてしまった。

一美さんは「教習所に『不合格』と言ってもらいたかった」と後悔する。

岩手県の佐藤隆さん(54)＝同＝は、脳血管性認知症になった父(88)を、免許の更新を見送るよう説得した。父は坂道でサイドブレーキをかけずに駐車し自分の車にひかれるなどの事故を起こすようになっていて「他人を巻き込まない方がいい」との家族の忠告を渋々受け入れた。隆さんは「身近な家族の話は聞かないことが多い。第三者に言われた方が効果があるかも」と話す。

国立長寿医療センター長寿政策・在宅医療研究部の荒井由美子部長らの厚生労働科学研究班は、認知症の基礎知識や事例に基づいた対処法、運転行動のチェック項目などをまとめた、家族のための支援マニュアルを同部のホームページ上で公開、全国の自治体にも配布する。

認知症ドライバーに多くみられる特徴

- どこへ行こうとしているのかが分からない
- 事故を起こしたことを忘れる
- センターラインを越えて蛇行運転する
- 交通標識や信号などの交通規則を守る気がなくなる
- 一定の車間距離をとる気がなくなる
- 車庫入れができない
- 逆走する

（出典：国士舘大の所正文教授「高齢ドライバー・激増時代」など）

認知症ドライバー どう"引退"させる？

中央線を越えても自覚がない。事故を起こしたことを忘れていた―。認知症ドライバーの特徴だ。記憶力や判断力が低下し、思わぬ事故につながりかねず、運転をやめてほしいと願う家族は多い。本人とどう向き合えば良いのだろう。

第三者が忠告／運転以外に生きがい

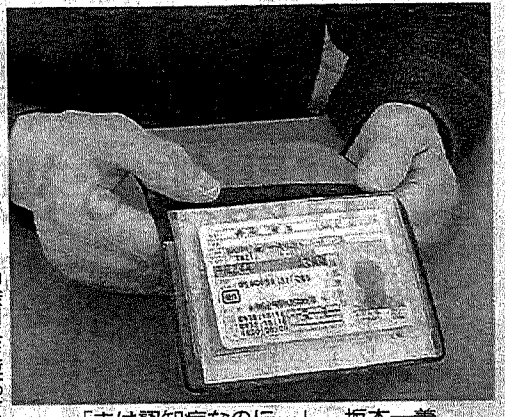
抵抗感なくすフォローを

◆推定30万人

警察庁は2005年時点で、運転免許を持っている認知症の高齢者数を30万人と推定した。国士舘大の所正文教授（交通心理学）は、免許保有率の高い団塊世代が高齢になり、さらに増えている可能性があると指摘。研究の蓄積もたしく「どういう症状が運転行動にどう結びつくのか、そのためにどういう検査を開発すべきか、まだ分からないことは多い」と話す。

昨年6月から運転免許を更新する際、75歳以上の高齢ドライバーに認知機能検査が義務付けられたが、正確な判断は難しいといわれる。日本交通心理学会の運営委員を務める石川淳也・中央自動車学校（盛岡市）社長は「疑わしい場合は、年齢に関係なく認知機能検査を受けさせるべきだ」と語る。

「認知症の人と家族の会」神奈川県支部は昨年9月、会員を対象にアンケートを実施した。世話人、田村加代子さんは「何十年も無事故で運転に自信を持っている人が多く、免許の返納には抵抗があるようだ」と分析。「高齢者にとって運転することは自立の象徴。簡単に返納させるのではなく、精神的フォローや代替手段が必要だ」と話す。



「夫は認知症なのに…」。坂本一美さん（仮名）が手にするのは、更新された夫の運転免許証

◆家族よりも

坂本一美さん(74)＝仮名＝は1年半前、夫(75)の退職後に移り住んだ山梨県から神奈川県に戻ってきた。車好きの夫がアルツハイマー型認知症と診断されたからだ。山小屋暮らしに必要だった車は、本人の知らない間に売却。しかし夫は昨年5月、免許を更新する際に70歳以上の人に求められる高齢者講習をクリアしてしまった。一美さんは「教習所に『不合格』と言ってもらいたかった」と後悔する。

岩手県の佐藤隆さん(54)＝同＝は、脳血管性認知症になった父(88)を、免許の更新を見送るよう説得した。父は坂道でサイドブレーキをかけずに駐車し自分の車にひかれるなどの事故を起こすようになっていて「他人を巻き込まない方がいい」との家族の忠告を渋々受け入れた。隆さんは「身近な家族の話は聞かないことが多い。第三者に言われた方が効果があるかも」と話す。

◆マニュアル

国立長寿医療センター長寿政策・在宅医療研究部の荒井由美子部長らの厚生労働科学研究班は、認知症の基礎知識や事例に基づいた対処法、運転行動のチェック項目などをまとめた、家族のための支援マニュアルを同部のホームページ上で公開、全国の自治体にも配布する。

荒井部長は「運転する意味や目的を考え、運転以外の生きがいや移動の手段を見つけることが大切だ」と話している。

認知症ドライバーに多くみられる特徴

- どこへ行こうとしているのかが分からない
- 事故を起こしたことを忘れる
- センターラインを越えて蛇行運転する
- 交通標識や信号などの交通規則を守る気がなくなる
- 一定の車間距離をとる気がなくなる
- 車庫入れができない
- 逆走する

（出典：国士舘大の所正文教授「高齢ドライバー・激増時代」など）

「免許」の返納どう勧める？

認知症ドライバーと向き合う家族

中央線を越えても自覚がない。事故を起こしたことを忘れていた―。認知症ドライバーの特徴だ。記憶力や判断力が低下し、思わぬ事故につながりかねず、運転をやめてほしいと願う家族は多い。本人とどう向き合えば良いのだろう。

警察庁は2005年時点で、運転免許を持っている認知症の高齢者数を30万人と推定した。国士舘大の所正文教授（交通心理学）は、免許保有率の高い団塊世代が高齢になり、さらに増えている可能性があると指摘。研究の蓄積も乏しく「どういう症状が運転行動にどう結びつくのか、そのためにどういう検査を開発すべきか、まだ分からないことは多い」と話す。

昨年6月から運転免許を更新する際、75歳以上の高齢ドライバーに認知機能検査が義務付けられたが、正確な判断は難しいといわれる。日本交通心理学会の運営委員を務める石川浮也・中央自動車学校（盛岡市）社長は「疑わしい場合は、年齢に関係なく認知機能検査を受けさせるべきだ」と語る。

「認知症の人と家族の会」神奈川県支部は昨年9月、会員を対象にアンケートを実施した。世話人田村加代子さんは「何十年も無事故で運転に自信を持っている人が多く、免許の返納には抵抗があるようだ」と分析。「高齢者にとって運転する」ことは自立の象徴。簡単に返納させるのではなく、精神的フォローや代替手段が必要だ」と話す。

認知症ドライバーに多くみられる特徴

- とこへ行こうとしているのかが分からない
- 事故を起こしたことを忘れる
- センターラインを越えて蛇行運転する
- 交通標識や信号などの交通規則を守る気がなくなる
- 一定の車間距離をとる気がなくなる
- 車庫入れができない
- 逆走する

（出典：国士舘大の所正文教授「高齢ドライバー激増時代」など）

代替手段提示が大切

坂本一美さん(74)＝仮名＝は1年半前、夫(75)の退職後に移り住んだ山梨県から神奈川県に戻ってきた。車好きの夫がアルツハイマー型認知症と診断されたからだ。山小屋暮らしに必要だった車は、本人の知らない間に売却。しかし夫は昨年5月、免許を更新する際に70歳以上の人に求められる高齢者講習をクリアしてしまった。一美さんは「教習所に『不合格』と言ってもらいたかった」と後悔する。

「夫は認知症なのに…」。坂本一美さん（仮名）が手にするのは、更新された夫の運転免許証

第三者の説得も有効

岩手県の佐藤隆さん(54)＝国立長寿医療センター長寿政策・在宅医療研究部の荒井由美子部長らの厚生労働科学研究班は、認知症の基礎知識や事例に基づいた対処法、運転行動のチェック項目などをまとめた、家族のための支援マニュアルを同部のホームページ上で公開、全国の自治体にも配布する。

荒井部長は「運転する意味や目的を考え、運転以外の生きがいや移動の手段を見つけることが大切だ」と話している。

同＝は、脳血管性認知症になった父(88)を、免許の更新を見送るよう説得した。父は坂道でサイドブレーキをかけずに駐車し自分の車にひかれるなどの事故を起こすようになっていて「他人を巻き込まない方がいい」との家族の忠告を渋々受け入れた。隆さんは「身近な家族の話は聞かないことが多い。第三者に言われた方が効果があるかも」と話す。

意味や目的を考えて

中央線を越えても自覚がない。事故を起こしたことを忘れていた―。認知症ドライバーの特徴だ。記憶力や判断力が低下し、思わぬ事故につながりかねず、運転をやめてほしいと願う家族は多い。本人とどう向き合えば良いのだろう。

認知症ドライバーに多くみられる特徴

- どこへ行こうとしているのかが分からない
- 事故を起こしたことを忘れる
- センターラインを越えて蛇行運転する
- 交通標識や信号などの交通規則を守る気がなくなる
- 一定の車間距離をとる気がなくなる
- 車庫入れができない
- 逆走する

（出典：国士舘大の所正文教授「高齢ドライバー・激増時代」など）

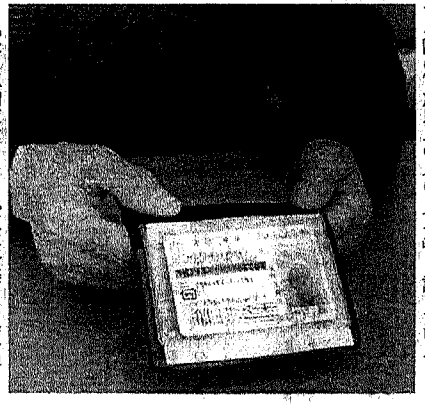
認知症と運転免許

警察庁は2005年時点で、運転免許を持っている認知症の高齢者数を30万人と推定した。国士舘大の所正文教授（交通心理学）は、免許保有率の高い団塊世代が高齢になり、さらに増えている可能性があると指摘。研究の蓄積も乏しく「どういう症状が運転行動にどう結びつくのか、そのためにどういう検査を開発すべきか、まだ分からないことは多い」と話す。

昨年6月から運転免許を更新する際、75歳以上の高齢ドライバーに認知機能検査が義務付けられたが、正確な判断は難しいといわれる。日本交通心理学会の運営委員を務める石川淳也・中央自動車学校（盛岡市）社長は「疑わしい場合は、年齢に関係なく認知機能検査を受けさせるべきだ」と語る。

所正文・国士舘大教授

「認知症の人と家族の会」神奈川県支部は昨年9月、会員を対象にアンケートを実施した。世話だった車は、本人の知らない間に売却。しかし夫は昨年5月、免許を更新する際に70歳以上の人に求められる高齢者講習をクリアしてしまった。一美さんは「教習所に『不合格』と言ってもらいたかった」と後悔する。



「夫は認知症なのに…」。坂本一美さん（仮名）が手にするのは、更新された夫の運転免許証

人田村加代子さんは「何十年も無事故で運転に自信を持っている人が多く、免許の返納には抵抗があるようだ」と分析。

「高齢者にとって運転することは自立の象徴。簡単に返納させるのではなく、精神的フォローや代替手段が必要だ」と話す。

坂本一美さん（74）＝仮名＝は1年半前、夫（75）の退職後に移り住んだ山梨県から神奈川県に戻ってきた。車好きの夫がアルツハイマー型認知症と診断されたからだ。山小屋暮らしに必要意味や目的を考え、運転以外の生きがいや移動の手段を見つけることが大切だ」と話している。

岩手県の佐藤隆さん（54）＝同＝は、脳血管性認知症になった父（88）を、免許の更新を見送るよう説得した。父は坂道でサイドブレーキをかけずに駐車し自分の車にひかれるなどの事故を起こすようになっていて「他人を巻き込まない方がいい」との家族の忠告を渋々受け入れた。隆さんは「身近な家族の話は聞かないことが多い。第三者に言われた方が効果があるかも」と話す。

国立長寿医療センター長寿政策・在宅医療研究部の荒井由美子部長らの厚生労働科学研究班は、認知症の基礎知識や事例に基づいた対処法、運転行動のチェック項目などをまとめた、家族のための支援マニュアルを同部のホームページ上で公開、全国の自治体にも配布する。

荒井部長は「運転する

媒体名：岐阜新聞　　掲載日：2010/2/13

運転の意味、目的考えて

認知症ドライバーと向き合う

からだ・こころナビ

中央線を越えても自覚がない。事故を起こしたことを忘れていた―。認知症ドライバーの特徴だ。記憶力や判断力が低下し、思わぬ事故につながりかねず、運転をやめてほしいと願う家族は多い。本人とどう向き合えば良いのだろう。

警察庁は2005年時点で、運転免許を持っている認知症の高齢者数を30万人と推定した。国士舘大の所正文教授（交通心理学）は、免許保有率の高い団塊世代が高齢になり、さらに増えている可能性があると指摘。研究の蓄積もそしく「どういう症状が運転行動にどう結びつくのか、そのためにどういう検査を開発すべきか、まだ分からないことは多い」と話す。

昨年6月から運転免許を更新する際、75歳以上の高齢ドライバーに認知機能検査が義務付けられたが、正確な判断は難しいといわれる。日本交通心理学会の運営委員を務める石川淳也・中央自動車学校（盛岡市）社長は「疑わしい場合は、年齢に関係なく認知機能検査を受けさせるべきだ」と語る。

「認知症の人と家族の会」神奈川県支部は昨年9月、会員を対象にアンケートを実施した。世話人田村加代子さんは「何十年も無事故で運転に自信を持っている人が多く、免許の返納には抵抗があるようだ」と分析。

「高齢者にとって運転することは自立の象徴。簡単に返納させるのではなく、精神的フォローや代替手段が必要だ」と話す。

坂本一美さん(74)＝仮名＝は1年半前、夫(75)の退職後に移り住んだ山梨県から神奈川県に戻ってきた。車好きの夫がアルツハイマー型認知症と診断されたからだ。山小屋暮らしに必要だった車は、本人の知らない間に売却。しかし夫は昨年5月、免許を更新する際に70歳以上の人に求められる高齢者講習をクリアしてしまった。一美さんは「教習所に『不合格』と言ってもらいたかった」と後悔する。

岩手県の佐藤隆さん(54)＝同＝は、脳血管性認知症になった父(88)を、免許の更新を見送るよう説得した。父は坂道でサイドブレーキをかけずに駐車し自分の車にひかれるなどの事故を起こすようになっていて「他人を巻き込まない方がいい」との家族の忠告を渋々受け入れた。隆さんは「身近な家族の話は聞かないことが多い。第三者に言われた方が効果があるかも」と話す。

国立長寿医療センター長寿政策・在宅医療研究部の荒井由美子部長らの厚生労働科学研究班は、認知症の基礎知識や事例に基づいた対処法、運転行動のチェック項目などをまとめた、家族のための支援マニュアルを同部のホームページ上で公開、全国の自治体にも配布する。

荒井部長は「運転する意味や目的を考え、運転以外の生きがいや移動の手段を見つけることが大切だ」と話している。

「夫は認知症なのに…」。坂本一美さん（仮名）が手にするのは、更新された夫の運転免許証

認知症ドライバーに多くみられる特徴

- どこへ行こうとしているのかが分からない
- 事故を起こしたことを忘れる
- センターラインを越えて蛇行運転する
- 交通標識や信号などの交通規則を守る気がなくなる
- 一定の車間距離をとる気がなくなる
- 車庫入れができない
- 逆走する

（出典：国士舘大の所正文教授「高齢ドライバー激増時代」など）

くらし からだ

シニア情報

国立長寿医療センター（愛知県大府市）長寿政策・在宅医療研究部は、車の運転を続けてきた高齢者が認知症になった場合の対処法を家族にアドバイスするマニュアルを作成した。無料でダウンロード配布している。

同センターが3年にわたって認知症の人が運転するリスクや社会支援の在り方などについて研究してきた成果を生かした。認知症の

＊ 認知症ドライバーへの対処法

原因別の運転の特徴や、運転をスムーズにやめてもらうためのノウハウ、運転をやめた後の接し方などのアドバイスをイラスト付きで分かりやすく解説、事例紹介もある。

入手は同センターのホームページから。アドレスはhttp://nils.go.jp/department/dgp/index—dgp—j.htm